

# 中島敦の〈別府〉——「断片三」を中心に——

橋 本 正 志

## 【要 旨】

中島敦の「断片三」は、別府にあった満鉄療養所を舞台にしている。小論では、中島が肋膜炎療養のため大連から別府に転地した経緯に着目し、「断片三」が当時の満鉄経営の裏面を織り込みながら、実際の療養所の様子を基に執筆されたことを明らかにした。とくに文中における別府の風景描写は、後にステイヴンソンのサモア滞在を描いた「光と風と夢」にも活かされており、中島文学の表現と展開に大きな影響を与えたことを指摘した。

## 【キーワード】

別府 満鉄療養所 温泉 外地 満洲

## はじめに

中島敦（一九〇九—一九四二）は、一九二七（昭和二）年（十八歳時）に肋膜炎の療養のため別府に滞在した。「中島敦年譜」（鷺只雄氏作成）の「注」<sup>①</sup>によれば、田鍋幸信氏の中島家十三代靖（綽軒）氏五女（十四代隴臣氏の妹）吉村彌生氏への聞き書き（昭和五十七年七

月五日）によって裏付けられている。すなわち「大連から別府に行く前、門司にいた私のところで四、五日泊って行ったと思います」と。

実際に中島は、その年の秋口から冬の間にかけて別府市内の南満洲鉄道株式会社療養所（満鉄療養所）に療養し、その経緯や滞在経験を基にいくつかの文章を執筆している。現在「断片一」（病気になった時のこと）、「断片三」（朝、此の療養所で一番早く、……）」として全集に収録されているものが該当し、それらは「習作」とされた初期作品の原形として、文字通り「断片」に位置付けられている。

これらの「断片」は作品として完成された世界を有するものではないが、その後の中島文学の展開において看過し得ない内容と方法を含んでいる。同時代の〈外地〉における満鉄経営の裏面として〈内地〉の満鉄療養所を描くなど、早くも中島文学を貫く特質——広く東アジアに生きる人々の姿を描出する文学的方法——が萌芽的に表れていることは見逃せない。

とりわけ「満洲」を舞台とした習作「D市七月叙景（一）」（第一高等学校『校友会雑誌』第三二五号、一九三〇・一・二一）や、未完の大作「北方行」には、別府滞在中の療養体験を活かして執筆された場面が多くある。中島文学の出発点とその後の展開のありようを明らかにする上でも、詳細に分析することは重要であろう。

そこで本稿では、中島の「断片三」を中心に、中島の別府療養の経緯や、舞台となった満鉄療養所（現在の明豊中学・高等学校所在地）

の詳細を確認しながら、中島文学における〈別府〉の意義を明らかにしていきたい。

### 一、中島敦の別府滞在をめぐって

まず、主な中島敦年譜の記載事項を確認していく。中島は父・田人たびとの朝鮮、龍山中学校への転勤に伴って転入学した龍山小学校から、京城公立京城中学校を四年で卒業し、その後一九二六（大正十五・昭和元）年四月、第一高等学校に入学した。いくつかの年譜を辿ってみると、その翌年の夏、関東庁立大連第二中学校教諭嘱託として転勤していた父の元へ帰省した折に、肋膜炎を患ったことがわかる。④田鍋幸信氏編「中島敦年譜」では、

夏、大連に帰省中、肋膜炎で満鉄大連医院に入院、二月程で別府の満鉄療養所に移り、結局一年間休学、「病気になった時のこと」などの習作がある。（傍線引用者。以下同じ）

とあり、おそらく中島の「断片三」の内容（作中に登場する学生「井口」が語る次の一節）を根拠にしたものであると思われる。該当箇所を挙げてみたい。

前年の夏、東京の学校から帰省中、大連でろく膜を患つて、そこで二月程入院し、その予後に満洲の気候はよくないといふので、「あるM社の知人の紹介で」冬の間だけ此の療養所で過したのであつた（『全集3』三一七頁）

これに関して、⑤勝又浩氏「中島敦年譜」も、おそらくは④の「中島敦年譜」を踏襲する形で、

八月、帰省中に湿性肋膜炎にかかり大連の満鉄病院に入院、一年間休学することとなった。後、別府の満鉄療養所に移り、更に千葉県保田あたりに転地療養した。<sup>④</sup>

と記されている。最新版『中島敦全集別巻』所載の⑥鷺只雄氏「中島敦年譜」では、

夏、大連に帰省中、肋膜炎にかかり、満鉄病院に二ヵ月程入院、予後を別府の満鉄療養所で養い、一年間休学となる。<sup>⑤</sup>

とあり、その「注」（五一三頁）において、先の④田鍋氏「中島敦年譜」および「春、肋膜炎にかかり一年間休学する」とした⑦郡司勝義氏編「年譜」に拠ったことを明示している（ただし、郡司氏「年譜」には別府滞在に関する記述はない）。

以上から、中島敦の別府滞在は吉村彌生氏による証言の他には「断片三」に書かれた内容に基づくものであり、あくまで文中に「B市」として描かれた街にある「療養所」の記述などを根拠としているといえよう。なお齋藤勝氏は、中島が「断片三」で描いた別府での療養にかかる内容について、事実として「この記述を裏付けた証言はない」（一三五頁）とし、また休学（期間）の根拠としても、田人作の「中島敦年譜」（中島敦著／盧錫熹譯『李陵』所収、大平出版公司、一九四四・八）のうち「因病停学一年」とある部分を挙げている。<sup>⑦</sup>

一年間の休学についても、⑧鷺氏の「中島敦年譜」では、翌一九二八（昭和三年）年の「四月、二年に復学」とある一方で、「断片三」の内容に基づくならば、中島が一九二七年の「冬の間」に別府に滞在して、少なくとも「桜」の咲く頃まで（作中では五月に入った時点まで）療養生活を送った可能性も生じてくるため、実質的な期間は引き続き確認を要すると思われる。念のため各種年譜の記載事項の根拠につい

て触れた次第である。

また、中島が大連に帰省した際に入院した「大連の満鉄病院」(B) 勝又氏「中島敦年譜」は、以下の記事にみえるように、「関東都督府所管の大連医院」を満鉄が引き継いだものである。この「大連医院」の満鉄引き継ぎの経緯については、次のように示されている。

会社創立以前に在つては大連に関東都督府所管の大連医院と奉天、公主嶺に居留民会の設立した病院があつた何れも一般居住者の診療を為し又大連、遼陽、奉天、鉄嶺、其他六箇所の地に野戦鉄道提理部所属の診療機関があつて専ら提理部員の診療に従事してゐた明治四十年四月会社は業務開始と共に是等提理部所属の診療機関を引継ぎ本院を大連に、分院を撫順千金寨に、出張所を地方八箇所に置き専ら会社従業員の治療に当らしめた附属地の居住者漸く増加し同年十月都督府所管の大連医院及居留民会経営の医院を会社に於て引受けたると同時に医院は総て一般居住者に開放することとした<sup>8)</sup>。

以上から、中島が大連で入院した先は「大連の満鉄病院」ではなく、<sup>A)</sup>田鍋氏の「中島敦年譜」の呼称、満鉄の「大連医院」がより正確であるうか。ちなみにこの満鉄の大連医院は、中島が入院する直前に新築されており、その概観については次のようにある(同資料に「大連医院全景」の写真も添えられているが、不鮮明なため、別資料から図1の写真を挙げておく)。

大連医院に至つては大正十二年より新築に着手し十五年竣工を見内容外観共に我国に於ても其比を見ざるものである其敷地面積二万坪、近世ローマネスク鉄筋コンクリート煉瓦幕壁張の様式を以て六層の本館並其分館等を建設し之に要した金額六百余万元に達

し総延坪一万三千六百六十余坪、本館病床数五百八十余を有してゐる<sup>9)</sup>。

ところで、中島の京城中学校時代の同級生(三、四年生時)であり、親しい友人の一人であつた小山政憲氏(おやま)元別府大学文学部英文科教授)が、往時の中島との交流について綴つた文章、文治堂版『中島敦全集』第一巻月報『ツシタラ4』(文治堂書店、一九六〇・一一・二〇印刷)巻頭収載の「中島敦の思い出」(目次は「中島敦の思ひ出」)は、中島研究において大変貴重な資料として知られている。この文章を読んだ当時大学生であつた田鍋幸信氏が、後に小山氏の自宅を訪問し、聞き取りをおこなつてゐる。



図1 大連医院  
(南満洲鉄道株式会社地方部衛生課編『南満洲鉄道附属地衛生概況(昭和3年度)』(南満洲鉄道株式会社、1930年3月30日)より転載)

「ツシタラ」に書いた後で、東京の方の大学の学生が、卒論でとりあげるからとやってくる。その時はまだ読んだ作品に対する印象も強かったし、よく話していたんだが、そのなかで特によくなってきたのは、日大の田鍋幸信という人だね。私が書いたのを見て感激してくれて、いろいろきかれたんだけど、私が知っているのは月報に書いたぐらいのことなんだ。それでその当時の友だちを紹介してあげたんですよ。同窓のね。そしたらね、中島敦のいろんな面を、その人が集めてくれて知ったようなことなんだ。(原文・横書き)

小山氏の「私達が湯浅猛君(克衛氏)等と同人雑誌をやっていたが、彼は交友会誌に投稿するだけで、ついに仲間にはならなかった」との回想をはじめ(「中島敦の思い出」、こうした小山氏が明らかにされた交友関係などのエピソードは、田鍋氏の手で『中島敦・光と影』(前出)の中にもまとめられている。下記の『交友会誌』に関する証言も含めて、いずれも当時の中島の姿が鮮やかに甦るものばかりである。小山氏は、『校友会雑誌』その他のこと)においても、

中島君が京城中学の『校友会雑誌』に作品を出したのは、三年生の時、漢詩と所感のようなものだったと思いますが、はつきりはしません。また訳詩集のようなものも出し、その中にボードレルがあったと思うのですがこれまたはつきりしません(『中島敦・光と影』所収、一九八頁)

との証言を残している。これら中島の京城中学時代の逸話は、田鍋氏による聞き書きの経緯などを含めて、あらためて貴重な内容であるといえよう。残念ながら、『漢詩と所感』『訳詩集』に類する作品は現在まで確認できていないが、中島が在学していた間(大正十一～十五年)

の京城中学の『校友会誌』が見つければ、中島文学の初期作品の特質とその後の展開の解明に繋がる第一級の資料となる可能性が高く、切に「発見」を期待したい。

## 二、別府の満鉄療養所について

さて、小山氏と田鍋氏の交流はその後も続き、後年田鍋氏は小山氏とともに別府の満鉄療養所について調査をおこなっている。中島と満鉄療養所との関わりについて、小山氏は次のように述べている。

また中島君が一高時代、休学して療養したと言われる満鉄療養所は現在私の住んでいる近くの明星学園になっています。玄関や池などは当時のままで、ただもつと松林があったそうです。戦後、進駐軍によってキリスト教の孤児院となり、その後明星学園になったものです。(『中島敦・光と影』所収、二〇〇頁)

田鍋さんは今では、中島敦研究の第一人者でね、昭和56年に「写真集<sup>写真集</sup>中島敦」(創林社)を編集した。

その時やってくる、満鉄の保養所はどこだろうってきかれてね。私もいっしょに探したが、結局明星学園だということになった。ところが敦が入っていた療養所はもうないですね。写真集に初めは今の姿を入れたらと考えたんだけど、それでは昔のことはわからないのでやめたんです。

―満鉄の療養所にいたのは何年頃ですか？

大正15年(昭和元年)4月に第一高等学校文科甲類に入って、その翌年に肋膜炎で一年間休学した時だと思っ。

―年譜の昭和7年のところに「療養所にて」という短篇をもうむとありますが、これが満鉄の療養所でしょうか？

そうですね。草稿が残っています。僕は読んだ記憶がありません。(原文・横書き)

証言内の「明星学園」は、周知の通り一九九八(平成十)年に学校法人別府大学と合併し、そのうち明星中学校・高等学校は現在、明豊中学・高等学校になっている。満鉄療養所は同校の敷地にあったと推定されるが、この満鉄療養所(満鉄別府療養所)は、元々別府ホテルとして営業されていた建物を利用したものであり、『別府市誌』によれば「別府市街の西方十六町にして、京都帝国大学附設地球物理学研究所の西に隣接す、当初大阪商船株式会社の別府ホテルとして経営せし所なり。地積五千六百坪、風光の美なること、物理学研究所と共に、別府郊外の双壁と称せらる」との評判であった。他の資料にもまた、

別府にホテル(別府ホテル)がオープンしたのは、四四年九月であった。寝台付客室(洋室)一四、畳敷客室(和室)七室のほか、遊技室、応接室、玉突室、酒場、大小四つの浴室を備えたもので、「眺望の雄大にして佳絶を極むるの点に至りては、比を全国中のホテルに見るもの無かるべし」(大正三年『別府町史』全)というものであった。現在の明星学園の所に建設されたもので、満鉄別府療養所を経て、のちに小百合愛児園となった。

とある。たしかに中島の「断片三」にも「木造の灰色に塗った二階建ての洋館」で、

人々はヴェランダに、よく出てくるやうになつた。／ヴェランダの上からは、庭の大きな松をこして、市の小さくまとまつた〔ウス鼠色の〕屋根瓦の列の上に、海が霧の様にぼんやり浮んで

見えた。(『全集3』三二二頁)

夜になると、人々は娯楽室に集つた。／撞球と麻雀と、トランプと将棋と蓄音器とに各々別れて、夜おそくまで騒いで居た。(『全集3』三三三頁)

とあることから、「断片三」の舞台の「療養所」は、この旧別府ホテルの建物(図2参照)を利用した満鉄療養所がモデルになっているとみて差し支えないであろう。



図2 鶴見岳を背にした別府ホテル  
(絵葉書、萩原敬、全体部分、大正前期～後期頃か)

以下に経緯をまとめると、一九一一年（明治四十四）年九月に大阪商船株式会社により別府ホテルが「最初のホテル」として竣工し、その後一九二四年（大正十三年）八月に満鉄の別府療養所となった。後に別府満鉄館と改称されたが（後述）、戦後に「土地七、一三七・〇〇」「建物四〇四・〇〇」（坪数）、「土地三六一、八五〇・〇〇」「六一四、四五七・〇〇」（簿価）、「一、三七二、九六三・六三二」（処分価格）、「三九六、六五六・六三二」（処分益）の査定額で、「備付什器簿価七、〇三六・三七円」とともに一、三八〇、〇〇〇円をもつて大分県庁に特讓されたという。<sup>16</sup> その後は次の通り、小百合愛児園の分園となり、さらに明星学園を経て、現在は明豊中学・高等学校となっている。このように見てくると、当地は戦前から戦後を通じて、一貫して療養や養育、教育の場として、さまざまな人々の回復や成長などに関わってきた要所であったことがわかる。

昭和六年此の地にささやかな家を作り、修道院として修養と教化の道にいそしんでおりましたが、昭和八年十月六日の朝玄関先に捨てられている可愛い赤ちゃんを拾い上げて養育したのがはじまりで、小百合愛児園の名前のもとに乳幼児の収容施設として発足したのは、それから二年後の昭和十年六月八日で時已に十五名を収容しておりました。／「中略」終戦後は戦災引揚などによつて収容を要する子供が急増加して参りましたが、園舎狹隘のため全く収容が出来なくなりました。／この時県は元の満鉄療養所を買収し、児童保護施設として経営を本園に委託されましたので、これを小百合愛児園として経営し今日に及んでおります。<sup>17</sup>

また『南滿洲鉄道株式会社第二次十年史』によれば、一九二四年八月に別府に「療養所」が設置され、翌一九二五（大正十四）年五月から入所が開始されたという。

業務上傷痍疾病の為入院治療を受くる者年々六百名内外に達し中には温泉療養を必要とする者亦尠からざるを以て会社は大正十一年四月以来湯岡子温泉の一部を借上げ会社温泉療養所に充て治療上遺憾なきを期せり

然るに右患者中には内地に転地療養せしめ其の経過を一層佳良ならしむる必要を認めらるゝものあるに依り大正十三年八月大分県別府に療養所を設置し（十四年五月より入所せしむ）是等の患者を収容すると共に社員及家族並滿洲関係者の為汎く開放して一般の療養に便ならしむることとせり今別府療養所に於ける収支を示せば左の如し<sup>18</sup>

たしかに「断片三」には、「従業員ではなくたゞ、縁故や紹介で、此処に泊つて居るものが三四人は居た」（三一七頁）とあり、満鉄の社員のみならず、その家族や滿洲関係者などの一般に広く開放した、という療養所の収容者資格をよく伝えている。ちなみに、この別府の療養所の収支（昭和元年度）は、収入が五、五四九円、支出が一三、二八九円、不足が七、七四〇円であり、設置以来赤字経営が続いていたようである。<sup>19</sup> 他にも、以下のような同内容の記事があることから、収容資格については、ほぼ当時の条件がそのまま「断片三」の記述に反映されているとみてよいであろう。

大正十一年四月湯岡子温泉に公傷社員の為に療養所を設け又十三年八月大分県別府に同様の設備をなし疾病に罹れる一般社員は勿論家族にも亦加療の便を与へてゐる<sup>20</sup>

業務上ノ傷痍疾病ノ為入院治療ヲ受クル者年々600名内外ニ達シ、中ニハ温泉療養ヲ必要トスル者亦尠カラス、依テ大正十一年四月以来、湯岡子温泉ノ一部ヲ借上ケ、会社温泉療養所ニ充當シ以

テ此等患者ヲ收容シ治療上遺憾ナキヲ期セリ、然ルニ右患者ノ中ニハ内地ニ転地療養セシムレハ疾病ノ経過上一層好果ヲ来スヘシト認メラルモノアリ、依テ大正13年9月以来大分県別府ニ満鉄別府療養所ヲ設置シ之等患者ヲ收容スルト共ニ社員及其ノ家族並満洲関係者ノ為ニ汎ク開放シ以テ一般療養ニ便ナラシムルコトトセリ。(原文・横書き)

中島が大連医院から別府の満鉄療養所に移った理由に関する詳細な資料は残されていないが、少なくとも大連からの「内地」転院の背景に、「断片三」に記された「氣候」の問題以外にもこうした満鉄の公傷・疾病社員とその家族らを対象とする別府の療養所新設に伴う実情があったことが窺える。「満洲関係者」の患者として「内地」への「転地療養」による病状快復が見込まれるとの観測に基づいてなされた選択だった可能性もあろう。

実際に「断片三」に登場する学生の「井口」も「従業員ではなくたゞ、縁故や紹介で、此処に泊つて居るものが三四人は居た」うちの一人として描かれており、中島も自らの境遇をそうした記述に重ねていたと思われる。

前年の夏、東京の学校から帰省中、大連でろく膜を患つて、そこで二月程入院し、その予後に満洲の氣候はよくないといふので、「あるM社の知人の紹介で」冬の間だけ此の療養所で過したのであった(『全集3』三一七頁)

このように、別府の満鉄療養所は、公傷・疾病社員のために設置された施設ではあったが、設置以来継続して「一般社員」のみならずその「家族」や「満洲関係者」にも加療の機会を与えていたことがわかる。中島自身も、おそらく父や関東庁の官僚であった叔父・比多吉の

「縁故や紹介」で入所した経緯が「断片三」の記述の背景にあったのではないだろうか。実際の入院治療にかかる体験が執筆動機となり、「断片一」や「断片三」の筆致や舞台設定、表現に強い影響を与えていた可能性が指摘できよう。

もちろん小山氏が先の証言で触れた「療養所にて」という短篇の「草稿」に相当するものは、「断片三」あるいは「断片一」であろうが、たしかに「断片三」において「低い石垣」の中程の「門柱の標札」に「M会社療養所」と掲げられていたとある設定を、当時の満鉄療養所の写真資料と突き合わせてみても、かなり事実に近い舞台設定であったと思われる(図3参照)。また、「断片一」の冒頭において「小

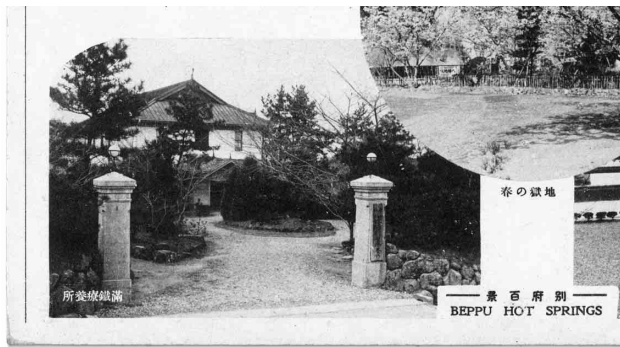


図3 満鉄療養所の門柱と石垣  
(絵葉書「別府百景」左下部分、大正後期～昭和戦前期頃か)

説」ではなく、事物を淡々と描写しようとする「練習」として綴られていたことも関連付ければ、「断片三」の内容からは、当時の満鉄療養所の実情を写し取り、「練習」とはいえりアリティをもって描写しようとしていた中島の姿勢が窺えるのである。

つまり「断片三」は、当時の満洲における鉄道経営との関わりで、その裏面たる「公傷社員」らを対象とした福利厚生施設の新設といった当時の社会的な事実を織り込みながら描かれていたのである。ちなみに、中島が療養した昭和二年度の收容患者数は四十八名で、延べ人数は二、二〇六名であったという。また『南満洲鉄道株式会社三十年略史』には、次に引く通り、一九二四年九月に「大分県別府満鉄館（元別府療養所と称した）を新設」と記されていることから、一九三五（昭和十）年度末までに満鉄療養所から名称が変更されたようである。その当時の收容人数は「プレベントリウム」三十床（五四〇頁の次表）であった。

会社社員にして業務上傷病の為入院治療を受くる者の中、温泉療養を必要とするもの及冬季内地に転地療養せしむれば疾病の経過上尚一層効果ありと認めらるゝものに対しては、会社はこれ等患者の治療上遺憾なきを期する為、大正十一年度湯岡子に同地温泉会社の一部を仮受け湯岡子温泉療養所を設置し、又同十三年九月大分県別府満鉄館（元別府療養所と称した）を新設しこれ等患者を收容して療養に努めてゐる。而して後者は公傷患者のみならず社員及其の家族並満洲関係者の為汎く開放し以て結核以外の一般療養者の便に供してゐる。<sup>33)</sup>

以上から、「断片三」に描かれた「M会社療養所」の様子は、実際の満鉄療養所の状況にほぼ合致したものであり、少なくとも舞台としては、大方事実在即して描かれていると解釈してよいのではないだろ

うか。「断片三」の背景には、満鉄の公傷・疾病社員やその家族ら満洲関係者を対象に、とくに冬季の「転地療養」の場として、温泉地別府が治療回復の役割を担っていた当時の情況が指摘できるのである。

### 三、「断片三」に描かれた「療養所」

引き続き「断片三」の記述を手がかりに、舞台の「療養所」について検討していく。とくに「療養所」の所在地や街の描かれ方について考察していきたい。

あらためて「断片三」の舞台は「B市」の「療養所」である。「一」では、主人公の学生「井口」は肋膜炎を患っており、その療養のために「二階」に滞在している。階下の「ロシヤ人の老婆」は、今「日本の南の海岸」の「温泉地」に來ていることに「思はず深い溜息を吐く」。他にも「満洲から來た、鉄嶺で全身やけどをしたのだといふ赤ら顔の男」もいる。

「二」の冒頭で、温泉地「B市」と「療養所」は次のように書かれている。

温泉地としてばかりでなく、氣候の温暖な点でも有名な裏九州のB市のずつと山の手の高地で、殆んどT山の麓といつてい、位の所で、低い石垣に小松を植え並べた構ひの中程の、古びて、見すばらしい門柱の標札によると、「M会社療養所」となつて居る。  
（『全集3』三二七頁）

この「B市」はもちろん別府市、「療養所」は満鉄療養所を指している。その「B市」の「ずつと山の手の高地」で「T山」（鶴見岳か）の麓に位置している「療養所」前の街道を、毎日、時間をきめた遊覧自動車白い埃を立て、通つて行つた」（三二二頁）とあるように、



また「療養所の所長」である「K氏」は「隣のやはり、温泉場であるO町から通つて居る」(三二八頁)とある。この「O町」とはおそらく「御越町」(現在の別府市亀川に属する)を指すであろうか(な

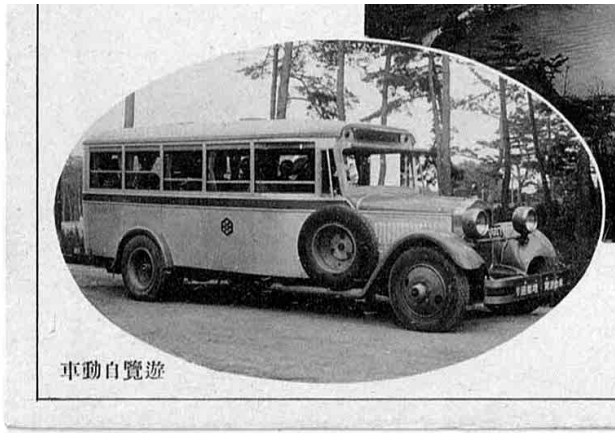


図4 遊覧自動車の一例  
(絵葉書「別府百景」左下部分、大正後期～昭和戦前期頃か)

「療養所」は「遊覧自動車」(図4参照)の走行する街道沿いにあつた。たしかに別府より観海寺方面、亀川方面から名所地獄を巡るバスが発着する<sup>28</sup>など、当時の満鉄療養所前の通りは、定期的な交通がある場所だったようである。参考までに一九三一(昭和六)年の交通調査記録が掲載された文献を見ると、実際の「満鉄療養所前」は、別府駅周辺と比べれば交通量が少なく、中島が訪れた当時間も比較的閑静な場所であつたと推測される。

すでに川村湊氏は、「断片三」について「別府の療養所での体験をもとにして、私小説的なものとして試みた創作」であり「歴史に押し流され、取り残された人々の姿を、共感を持って描こうとした」と高く評価している<sup>29</sup>。同氏は後の習作「D市七月叙景(一)」についても、満洲については「D市七月叙景」のなかで満鉄総裁や社員のこ

※本表は『別府市誌』(前出)などを参照して筆者が作成した。

O町	地名		事項
	西暦	和暦	
一九三五	昭和10	九月	大分県別府市と合併する。
一九〇一	明治34	十一月	大分県速見郡御越町となる。
一九二五	大正14	一月	大分県速見郡亀川町となる。なお、一九一一(明治44)年十月に御越町を亀川町に改称したとする文献もある。
一八八九	明治22	四月	大分県速見郡御越村(亀川村、内竈村、野田村が合併)となる。
一八七八	明治11	十一月	大分県速見郡が発足。
一九二四	大正13	四月	大分県別府市となる。
一八九三	明治26	四月	大分県速見郡別府町となる。

表一 「断片三」におけるアルファベットの地名について

お、他に大畑<sup>おほまたけ</sup>、乙原<sup>おつもと</sup>、あるいは大分などの地名も考えられるため、引き続き調査中である。御越町は中島が一九二七年に別府を訪れる以前に、すでに速見郡亀川町となっていたため、「断片三」の時間設定は、中島が滞在した期間外の可能性もある。表一は、これら「断片三」における地名(当時)の変遷についてまとめたものである。

行ってましたから「D市七月叙景」で書かれてある内容は、別府のその満鉄療養所なんかで関係者の患者さんたちからいろいろ聞いた話がかかれていと思いますね。<sup>8)</sup>

とも指摘しており、たしかに「断片三」の後半（とくに「四」「五」の内容）に列挙された「M社」への不満などは（一部は中島の親族を通じて得られた内容もあったかもしれないが）、中島が別府の満鉄療養所での滞在中に「公傷社員」らから見聞いた内容が含まれている可能性は十分であろう。「断片三」には「満洲」開発の過程で犠牲となり、見捨てられた現地の「苦力」らへの強い関心も窺える。後に長篇「北方行」（未完）で試みられた厳しい社会状況の下で生きる人間の追究といったテーマが先行的に表れており、中島文学を貫く姿勢が形成されたことは間違いないであろう。いわゆる〈外地〉での過酷な労働のさなかに負傷し、その治療のために〈内地〉へ渡った満鉄の従業員やその家族の姿に、自身の京城中学校時代までの〈外地〉体験と肋膜炎による入院、転地療養といった境遇を重ねるようになって、同時代に生きる人々の姿を物語に紡ごうとしたのではないだろうか。

日本の満洲政策の要でもあった鉄道経営の陰で翻弄される人間の姿に、中島の最たる関心が払われているといつてよい。そうした国籍を超えた人間への眼差しと自身の療養体験とを重ねて省察する場所として、「B市」の「療養所」は見出されたのである。その意味では、中島の「断片三」に描かれた〈別府〉は、同時代の満鉄経営に象徴される植民地主義の実態を別決する場所として描かれていたともいえよう。

このように「断片三」は、自己の療養体験を通じて中島に社会と東アジアの他者との関わりを強く意識させ、同時代に生きる人間像を追究する文学的な方法を獲得させた。それは別府の満鉄療養所という〈外地〉と繋がる場所にこそ見出された表現の試みでもあった。中島

にとつて満洲から別府へ、あるいはその逆へと行き交う人間模様の中に同時代の様相を捉えようとした「断片三」は、後の新たな文学的展開をもたらず源泉ともなっていないのではないだろうか。

#### 四、恢復の場としての〈別府〉

もとより「B市」は温泉地としても描かれている。そこは春の到来とともに「北」から訪れた人々に〈恢復〉をもたらず街でもある。「温泉」の効能によって、再び精気を取り戻した彼らの心身の恢復を、随所に自然風景を織り交ぜる文体により、街の様子とその変化の中に捉えている。移りゆく季節が写し出されている風景描写に着目してみたい。

ヴェランダの手欄のすぐ上まで、桜がすれ／＼に伸び上つて来て、その白く匂はしい梢の間を蜂がブン／＼唸りながら、いそがしくとびまはつて居た。（中略）／＼彼は苦笑して、煙草をふかしながら、ボンヤリ桜と街と海との白い風景を眺めて居た。（『全集 3』三三二頁）

「桜と街と海との白い風景」を一望する「ヴェランダ」からの眺めが印象的な一節である。こうした「B市」の描写は、中島が実際に満鉄療養所から眺望した印象をもとに執筆したものとみて間違いない。当時の様子が偲ばれるが、やや新感覚派の影響も感じられる文体からは、この時期の中島の文学的模索の跡も見てとれよう。「別館になつて居る日本間」に滞在する患者が「日本語とロシア語とチャンポンで話し合つて居た」とあるように、国際色豊かな雰囲気の中で療養生活を送る人々の様子が、彼らの用いる言語の様相にも映し出されている。

また、中島は「断片三」の「二」において、朝の「療養所」の「風呂場」の様子も丁寧に写実している。多少の脚色もあるうが、当時の満鉄療養所の浴場の様子を伝える描写として貴重である。

風呂場には誰も居なかつた。八畳位の広さの湯殿の中央を一坪あまり「に」しきつた湯壺で、その「みんな」たゞでかためた湯船の底から、澄明な温湯が滔々<sup>たうたう</sup>と湧き出て、絶えず「湯船の外に」あふれ出て流れ去るのである。天井と両側についたすりガラスの窓から射し入る白い光の底で、丁度加減のいゝ湯に首まで、つかりながら、さらさらと湯の「溢れ」流れて行く音を聞くのであつた。彼は「頭をあほむけに湯船の縁にのせ、」湯の中で上からは妙に屈折して、不具の様に短かく白く見える手足を思ひ切りのぼして見た。さうすると、もう病気が治つたといふ気持が、春が近づいたといふ事実と共に今更の様に考へられるのであつた。  
 (『全集3』三二七―三二八頁)

こうして春の訪れとともに「もう病気が治つた」という実感を綴つた文章は、かつて大連での入院生活を写し取つた「断片一」とは明らかに雰囲気異なっていることを指摘しておきたい。先に触れたように、「断片一」は満洲の十月に「M病院」に入院した体験を記したもののだが、「肋膜炎」と診断された自身の現在を、隣の病床で亡くなつた母親を看取る子どもの様子や、数日前に一緒に将棋を指した男の突然の死などと重ねながら静かに見つめている。夜になると病室に入り込んでくる「蛾」の様子を眺めるなど無聊に苦しむ一方で、看護婦などの周囲の人物との関わりについても深く求める余裕は感じられない。冒頭に「之は小説ではない。たゞ物を淡々と描写しようとする練習にすぎない」と宣言されたように「淡々」とした筆致で素描された三章から成る断片であつた。

全体として傾向の異なる二つの断片であるが、次の「断片一」に描かれた「窓」から眺めた葉越しの「海」の風景描写には注目すべき点がある。

歩ける様になつて初めて、窓から外を眺める事が出来た。それまでは、ねながら蒼穹の一部を望むことが出来たゞけであつたが、窓からのぞくと、その空の下にすぐつゞいて、海が見えた。その向ふ側には大和尚の山々も見えた。そしてすぐ下にはごみごみした支那人町だの、所々に高く立つ洋風の家々の交つた大連の町が見えた。私はペコニヤの鉢を一つかつてそれを窓際に置いた。そして、そのや、紅味が、つた葉越に港を眺めたり、町の灯を望んだりするのを日課の一つにした。(『全集3』三一〇頁)

この場面と次の「断片三」における「B市」の「海」を描写した一節が酷似していることは看過できない。とくに「窓」から「外」の風景を眺め、目の前の植物越しに「海」が見える構図はまったく同じであるといつてよい。

「二階の一番東側の部屋の」学生の井口はやつと眼を覚す。薄樺色のカーテンの洩間から、午近い陽が明るい縞になつて、彼の顔にふり注ぐと、彼は、うるさ、うに、枕の位地<sup>くら</sup>をかへて、陽をさけ、近くの卓子の上に「巳に」置いてある新聞紙を取つて、ねたま、拵<sup>しら</sup>げて読みはじめた。読み終ると、やつと起上つて、ベッドを下り、窓際に行つて、カーテンを上げる。明るい光が、壁についた銀色の鏡や水道栓や、真白な洗面器に直接にあたつて、ひびく、まぶしい。外を見ると、窓近くのびた、桜の枝を透して、「ずつと下に」ゴミくしたB温泉町の家並の向ふに、海が薄白い刃物の様に光つて居る。(『全集3』三一六―三二七頁)

大連と「B市」の「窓」から見える「海」は、共通してそれぞれの主人公の視線の先に見出されている。「断片一」における大連の「海」の様子と比べると、「断片三」の「B市」の「海」の描写は、日光の明るさがより強く感じられる。おそらく大連医院から別府の満鉄療養所への転院による心身の回復が、こうした全体的な明度の相違にも表れているといえよう。

これらの「窓」からの眺めは、大連の秋から、やがて「B市」の春の様子へと移り変わっていく。(外地)から(内地)への移動に重ねて季節の推移を描く方法は、後年「自分は作家となるべく生れついている」との「信念」を抱きながら、南洋サモアの陽光の中に結核で斃れるR・L・ステイヴンソンの晩年を描いた長篇「光と風と夢」において、ときに「将棋」を指したりもした二階の「病室」の場面(『全集一』一四一頁)に活かされることになる。

昨夜も私は長いことエランダに出て、荒い風と、それに交る雨粒とに身をさらしてゐた。今朝も斯うやつて強い風に逆らつて立つてゐる。何か烈しいもの、兇暴なもの、嵐のやうなものに、ぐつとぶつかつて行きたいのだ。さうすることによつて、自分を一つの制限の中に閉込めてゐる殻を叩きつぶしたいのだ。何といふ快さだらう！ 四大の峻烈な意志に逆らつて、雲と水と丘との間に屹然と独り目覚めてゐることは！ 私は次第にヒロイックな気持になつて行つた。(中略)明るさが次第に、野に丘に海に加はつて行く。何か起るに違ひない。生活の残渣や挟雑物を掃出して呉れる何かが起るに違ひないといふ欣ばしい予感に、私の心は膨れてゐた。(『全集一』二一四頁。傍点原文。以下同じ)

「病室」の「窓」から「ヴェ(ズ)ランダ」への動きそのものが主人公の心身の回復への過程を体現している。それぞれの人物たちがい

ずれも「病室」の「窓」と、そして「ヴェ(ズ)ランダ」を経て、大連から別府、そしてサモアの「海」などの自然に投影する心象の描写は、中島文学の主題の成立とその表現方法や展開を示しているといえよう。直後にステイヴンソンが現地の自然の中で超越的な体験をする場面の原風景でもあったのではないだろうか。

「断片一」や「断片三」に描かれた風景描写は、やがて自己の鬱屈した内面のみならず「窓」の「外」に生きる人々の諸相を写し取る素地ともなった。その意味で「窓」や「ヴェ(ズ)ランダ」は、満鉄の公傷・疾病社員や中国、サモアの人々など、(外地)との関わりで世界を捉える入り口であり、足がかりとなる場でもあった。後年、中原大戦下の中国を舞台とする「北方行」や、サモアを舞台にイギリス、アメリカ、ドイツの角逐の経緯を織り込んで、自己の生き方と文学をめぐって葛藤を繰り広げる「光と風と夢」の主題もまた見出されているのである。

次の「光と風と夢」の一節は、したがって大連医院や満鉄療養所の「窓」から、サモアの「エランダ」の先に具現化した風景として、中島の文学的展開のかたちそのものでもあったといえよう。

やがて眼下の世界が一瞬にして相貌を変じた。色無き世界が忽ちにして、溢れるばかりの色彩に輝き出した。(『全集一』二一四頁)

「淡々と」綴る「練習」に始まった中島文学の出発点は、別府滞在前後にわたる第一高等学校の休学期間を経て、やがて『校友会雑誌』に掲載される「D市七月叙景(一)」などの習作群を成立させる。作家志望の一青年が、東アジアの国際関係を背景に自らの身体を蝕む病と闘いながら、文学を通じて芸術的な達成を目論み、己の精神の回復と変貌とを願う中島文学の原形が成立していったのである。

その意味で、中島が別府の満鉄療養所の「窓」から眺めた眼下の別

府湾の風景は、後に「光と風と夢」のステイヴンソンが病と闘いながら、自己の変革を翹望する内面を生み出して母胎であったといえよう。第一高等学校休学前後の身体を蝕む病との闘いの中で、自らの文学のかたちをめぐって模索する中島は、後の「光と風と夢」において「一瞬の奇蹟を眼下に見ながら、私は、今こそ、私の中なる夜が遠く遁逃し去るのを快く感じてみた」との一節を書き記す。こうした表現は、別府での療養体験によってもたらされたのではないだろうか。危機を乗り越えた先に広がる眼下の「海」の風景は、中島文学のさらなる深化を促し、やがて〈南洋〉へと向かう文学的展開を予告させるものであった。別府の満鉄療養所を舞台とする「断片三」には、そうした中島文学の特質と可能性が早くも刻み込まれていたといえよう。

### 五、〈満鉄批判〉の場としての「療養所」

「断片三」では、「B市」の「療養所」に集う人々の様子を眺める「井口」の眼差しが印象的である。彼にとつて「療養所」は束の間の安らぎが得られる場所であると同時に、将来への不安もまた顕在化する場所としてあった。「療養所」の患者たちも、再び満洲へ赴く不安を隠せず、「M社」への不満を口々に語っている。以下は、そうした人々の声である。

M社は之以上何をしてくれるだらう。(中略)一体どうなるんだ。  
女房は。子供達は。(『全集3』三三四頁)

再びM社に使つて貰へるか、どうか、彼自身にもひどく疑問だった。とにかく、今暫くしてから、満洲にかへつて、社の医員に調べられた上できまることだ。もし、それで使つて貰へなかつたら(『全集3』三三四頁)

他にも「M社のくれる涙金なんか、しれたものだ」(『全集3』三三四頁)といった労働者たちの憤懣も記されている。「M社」に自らの運命が委ねられていることを自覚し、先の見えない不安の中に生活せざるを得ない患者の姿が描かれている。

あくまで「断片」ではあるが、巨大資本の下で過酷な労働を強いられ、組織の前では無力でしかない労働者の姿が「井口」の透徹した眼差しによって浮かび上がってくる。満鉄に翻弄される人々の内面が確かに掬い取られているのである。その意味では、「断片三」は満洲における植民地主義を支えた鉄道産業の非情さを、「療養所」という束の間の休息の場から剔抉する試みでもあった。中島が幼少の頃から〈外地〉での生活の中に感受していた認識がこうした筆致に反映されているのではないだろうか。

「断片三」の末尾の「六」は、いつしか「桜」の季節が過ぎ去り、初夏を迎えた「療養所」の様子が描かれている。ただし、次の冒頭部以降、中島の筆は折られ、未完に終わっている。

五月になると、もう、人々の満洲にかへる時期が近づいたのであつた。彼等は互に、かへつた上の方での計画など語りあつて居た。(『全集3』三三五頁)

患者たちの「M社」への「疑問」、そして「絶望的」な「いらだたしさ」に充ちた「視線」の行き場のなさ、これから初夏を迎えようとしている「B市」の風景の明るさとは対照的である。生活のために再び渡満しなければならぬ労働者の姿を通して、満鉄療養所の新設といった会社の厚生施策の陰で、新たな葛藤に直面する「公傷社員」らの現実的な問題を照出しようしたのであろう。満洲への「帰還」をめぐる相剋とそれに伴う諦念とを中島なりに描こうとしていたのではない。別府での療養体験は、中島に別府を満洲とのつながりで描く

新たな視座をもたらし、自らの文学をめぐる省察の機会を与えたのである。

中島は別府を離れた後に、さらに千葉県の保田近郊へ転地したとされる。その後、すでに触れた通り、第一高等学校の『校友会雑誌』に「満鉄総裁」をモデルに、その人物像や経営ぶりを戯画化した「D市七月叙景(一)」が掲載される。「断片三」の「四」には、すでに「M社総裁の話、彼の事業に対する方針について。その節約ぶりについて、それから、最後に彼等の最も関心事である、社員陶汰の意向について、……」(『全集3』三三三頁)とあることから、当初から自身の療養中の見聞を基に「満鉄総裁」の姿を戯画化し、いわば〈満鉄批判〉を繰り広げようとする構想があったことが見てとれる。

また中島の描いた「療養所」は、そこに集う人物から「悲しい文学論」を聞かされる場所でもあった。「プロ(レタリヤ)文学も、い、のはい、んですけど、悪いのはとても、かなひませんわね」(『全集3』三三二頁)といった会話を耳にした「井口」の「苦笑」する様子からは、中島のプロレタリア文学との距離感も垣間見られる。「断片三」には「M会社」への疑念が生じていく労働者の実感の中に満鉄への批判を盛り込もうとした一方で、プロレタリア文学を相対化する姿勢もあわせて指摘でき、中島の当時の文学的立場を措定する上で興味深い。

以上で見てきたように、中島の「断片三」には満洲政策に象徴される同時代の植民地主義を背景に、満鉄経営のありようを批判的に捉える場として〈別府〉が描かれている。東アジアを舞台に中島文学の新たな広がりが見られる中で、その〈外地〉と〈内地〉を往還する想像力は、やがて「D市七月叙景(一)」「北方行」などの社会性を伴った習作群を生み出していく。別府の満鉄療養所の「窓」から広がる風景は、やがて中島に〈南洋〉への憧憬をもたらし、後年ステューヴンソンのサモア行を描いた「光と風と夢」へと活かされることになる。そうし

た中島文学の出発点に〈別府〉が深く関わっていることは重視されてよいであろう。

### おわりに

中島敦の「断片三」は、第一高等学校在学中に肋膜炎治療のため滞在了した別府の満鉄療養所を舞台にしている。この療養所は、当時の満鉄の鉄道敷設事業と軌を一にして、公傷・疾病社員のために新設された厚生施設であり、「一般社員」のみならずその家族や満洲関係者にも加療の機会を与えるものであった。中島もおそらく父・田人や関東庁の官吏であった叔父・比多吉の縁故で入所したと思われる。

「断片三」には、そうした療養所での満鉄関係者らとの関わりを通じて、当時の満鉄経営の実態を織り込みながら、過酷な労働に従事する人々の様子が写し取られている。療養所の様子など、実際の入所者にしか書けない記述も多く見られる。舞台設定などは概ね事実在即しながら、「練習」として自らの療養体験をもとに描いたものであり、実際の満鉄療養所を舞台に、当時の満鉄を批判的に相対化した文章として評価できよう。日本の版図拡大を背景に、〈外地〉と〈内地〉を繋ぐ療養地としての別府開発の動きとも連動している。その意味で、「断片三」に描かれた〈別府〉には日本の満洲政策の裏面が映し出されていったといえよう。

中島にとつて〈別府〉は、自らの病と向き合いながら将来の文学像を模索する場所でもあった。「断片三」には後の習作へと繋がる表現方法が早くも散見される。「断片三」における新感覚派的な表現や、プロレタリア文学にも影響を受けたテーマ設定に明らかのように、同時代の文学思潮に対して敏感に反応し、今後の文学のかたちを見定めようとする出発期の模索の様相が読み取れるのである。

それらは後に「D市七月叙景(一)」や「北方行」などの作品において、

国際的な視点から東アジア社会に生きる人間像の探究の試みへと具体化する。中島文学の特質とその後の展開の源泉が、すでに「断片三」に伏在していたことは看過できない。

中島はさらに後年、ステイーヴンソンのサモア行に取材した「光と風と夢」の中で、自己の文学をめぐる模索や存在論的不安からの脱却を企図する主人公の姿を描いた。その精神的〈変貌〉の過程を描く場面は、かつて「断片三」で試みた表現方法に基づいている。中島の〈別府〉滞在が、その後の中島文学に影響を与えた可能性はきわめて大きいといえよう。〈別府〉での療養体験を基盤に自らの文学を開花させていったのである。

なお、拙論中には調査不足からくる誤り等も多くあると思われるが、御批正を乞う次第である。今後も引き続き、中島と別府との関わりについて考察していきたい。

## 付記

中島敦の文章の底本は、『中島敦全集』全三巻（筑摩書房、二〇〇一年十月十日、二〇〇一年十二月二十日、二〇〇二年二月二十日）とし、引用は全てこれに拠った（『全集1』などと略記した）。引用の際は、原則としてルビ・傍点・旧仮名遣いはそのままとし、旧漢字は新漢字へ改めた。

## 謝辞

別府大学図書館報『アルゴノート』所載の中島敦関係資料は、前別府大学附属図書館長の仲嶺真信先生にご教示頂いた。閲覧に際しては、別府大学附属図書館長の浅野則子先生に便宜を図って頂いた。記して深謝申し上げます。

## 註

- ① 鷺只雄「中島敦年譜」（筑摩書房版第三次『中島敦全集別巻』所収、筑摩書房、二〇〇二・五・二〇）五—三頁。
- ② 吉村彌生「中島家の人々」（田鍋幸信編著『中島敦・光と影』所収、新有堂、一九八九・三・一）一六七頁。
- ③ 田鍋幸信編「中島敦年譜」（梶井基次郎・牧野信一・中島敦・嘉村儀多・内田百閒・中勘助・広津和郎・瀧井孝作・網野菊・丸岡明・森茉莉著『昭和文学全集』第7巻所収、小学館、一九八九・五・一）一一—五八頁。
- ④ 勝又浩「中島敦年譜」（ちくま文庫版『中島敦全集3』所収、筑摩書房、一九九三・五・二四）四四—八頁。
- ⑤ 註①に同じ。四九—八頁。
- ⑥ 郡司勝義編「年譜」（筑摩書房版第二次『中島敦全集』第三巻所収、筑摩書房、一九七六・九・三〇、第一二刷）一九九二・一二・三〇—七六—六頁。
- ⑦ 齋藤勝「C 参考文献」（『中島敦書誌』〈近代文学書誌大系4〉所収、和泉書院、一九九七・六・三〇）一三五—頁。
- ⑧ 「第五節 衛生施設」（第八章 地方施設）「第二編 会社の事業」（『南满洲鉄道株式会社二十年略史』所収、南满洲鉄道株式会社、一九二七・四・一）三一一—三二二頁。
- ⑨ 前註に同じ。三一—三三頁。
- ⑩ 筑摩書房版第三次『中島敦全集別巻』に再録。一九八—二〇〇頁。
- ⑪ 小題「別府と中島敦」（小山政憲先生にきく 旧友中島敦とその文学（上））『アルゴノート』（別府大学図書館報）No.6、一九八二・一〇・一）四頁。
- ⑫ 前註に同じ。四—五頁。

- ⑬ 「第三十一節 満鉄別府療養所」「第二十一章 名所旧蹟」（別府市教育会編『別府市誌』所収、別府市教育会、一九三三・八・二五）五〇五頁。
- ⑭ 河野昭夫「1 旅館街の発達と共同浴場」「第四節 温泉町への発展」「第二章 近代化のみち」「第四編 今日に生きる」（『別府市誌』所収、別府市役所、一九八五・三・八）四七九〜四八〇頁。
- ⑮ 石橋英雄「明治時代の旅館」（別府市観光協会編著・半田康夫編集責任『別府温泉史』（全国著名温泉史叢書Ⅰ）所収、いずみ書房、一九六三・二・一）三三二〜三三三頁参照。
- ⑯ 「第二節 中国本土および満洲における開発機関」「第二章 開発関係閉鎖機関」「第二編 在外活動関係閉鎖機関」（閉鎖機関整理委員会編『閉鎖機関とその特殊清算』所収、在外活動関係閉鎖機関特殊清算事務所、一九五四・三・三二）四〇三頁。
- ⑰ ソラリ カルメラ「別府小百合愛児園概要奏上書」（大分県弘報室編『天皇陛下大分県行幸録』所収、大分県庁弘報室、一九五〇・三・二五）一三三頁。
- ⑱ 「口 療養所」「一 診療」「第五節 衛生施設」「第八章 地方施設」「第二編 会社の事業」（『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』所収、南満洲鉄道株式会社、一九二八・七・二五）一一二四頁。前註に同じ。
- ⑲ 前註に同じ。
- ⑳ 註⑧に同じ。三一二頁。
- ㉑ 「第五節 温泉療養所」「第四章 保健」（南満洲鉄道株式会社地方部衛生課編『南満洲鉄道附属地 衛生概況（昭和3年度）』所収、南満洲鉄道株式会社、一九三〇・三・三〇）一九頁。前註に同じ。
- ㉒ 「温泉療養」「社員保健」「第七節 衛生施設」「第七章 地方経営」「第二編 会社の事業」（『南満洲鉄道株式会社三十年略史』所収、南満洲鉄道株式会社、一九三七・四・一）五五三頁。
- ㉓ 稗田武士「遊覧自動車」（『最新別府案内』所収、別府温泉案内出版部、一九二四・八・一）八二頁。
- ㉔ 「第二節 交通量調査」「第二十九章 別府都市計画」（註⑬の『別府市誌』所収）五九九頁。および註⑭の『別府市誌』参照。五五七頁。
- ㉕ 註⑭の『別府市誌』参照。八八八頁。
- ㉖ 川村湊「五章 大連とハルビン」（『狼疾正伝―中島敦の文学と生涯』所収、河出書房新社、二〇〇九・六・三〇）八二、九二頁。
- ㉗ 川村湊「中島敦入門」帝国に抗する力を表現した作家」（『中島敦』〈KAWADE 道の手帖〉所収、河出書房新社、二〇〇九・一・三〇）五頁。
- ㉘ 中島の蔵本の一節（J. A. Smith, R. L. Stevenson (Great Lives), London: Duckworth, 1937, pp. 136-137.）との関連も認められよう。